

時代名を含む日本語学の論文の 英文タイトルについて

——日本語学の成果を海外に発信するために——

福 嶋 健 伸

1. はじめに—英語の必要性が高まっていること—

近年、研究成果を英語で書くことの必要性が高まっていることは否定できない。科学研究費補助金研究成果報告書の「研究成果の概要」に英文が必要となったことから、そのことがうかがえるだろう。このこと自体は、いわば、必然的な流れであり、日本語学の研究成果を海外に発信するためには、好ましいことであるともいえる。

しかし、自然科学系や社会科学系の分野と比べて、人文科学系の分野では、何故か、英語で論文を書くためのHOW-TO本が少ない。特に、歴史的な日本語の分野では、英語で何かを書くという準備が十分ではないように思われる*1。そのため、「かなりの時間をかけて英訳を考えたものの、正直、これでよいのか自信がない」「この用語は、英語で何といえよいか分からない」「英文タイトルや英文要旨の作成に、必要以上の時間をとっている」等の問題が生じているようにも思える。

研究で大切なのは、当然、その内容であり、英訳に時間をとられすぎているという事態は好ましいことではない。できれば、自然科学系や社会科学系のHOW-TO本等を参考にしつつ、「素早く、正確に、日本語学の論文（タイトル・要旨等含む）を、英語で書くための方法」を、もう少し本格的に検討していくことが望ましいと思う。

具体的には、例えば、「○○時代の日本語（○○時代の資料）」というようなことを英訳したい時に、英文タイトルのバリエーションの一覧のようなものがあれば便利ではないだろうか。

本稿では、このような状況を踏まえ、試験的に、時代名（江戸時代等）を含む日本語学の論文の英文タイトルを集め、そのバリエーションを示したい。な

お、本稿は、あくまで、試験的、かつ英文タイトル作成の際の手控え的な性格のものであり、扱っている英文タイトルもかなり限定されたものである。バリエーションを網羅的に示しているものではなく、このような方向での研究があると助かる、というイメージを示しているものとして、捉えて頂きたい。

2. 資料について

本稿では、日本語学会学会誌『日本語の研究』（1-1から6-3まで）を資料として、「〇〇時代の日本語（〇〇時代の資料）」という意味合いのことが、邦文タイトル・英文タイトルの両方に入っているものを選んだ。基本的に、論文／研究ノート／短信を対象としている。『日本語の研究』を選んだ理由は、日本語の歴史を扱う論文が比較的多く掲載されているということと、英文タイトルの信用度が比較的高いと判断できるためである。なお、調査の際にはCiniiを利用しており、Ciniiにおける制約は、基本的に、そのまま、本稿の制約に反映されている（例えば、Ciniiに示されていない論文は、原則、本稿でも取り扱っていない）。本稿の調査は、日本語学の研究に範囲を限定した上で効率的な英訳への貢献を念頭においたものであり、学術雑誌中の英文表記の統計的研究を目指したものではないことを予めお断りしておく。また、種々の制約により、網羅的なものではないことを繰り返しになるが付言しておきたい。

3. 時代を示す英訳のバリエーション

以下に、バリエーションを示す*2。

Unearthed Materials as Sources of Old Japanese Language Data (<Special Issue> The Current State of Document Research)

古代語資料としての出土物 (<特集>資料研究の現在)

(『日本語の研究』 4-1)

Speaker's Recognition in the *so* Adnominal Form Construction in Ancient Japanese : Relationship to Adjectival Sentences

上代「-ソ-連体形」文における話し手の認識と形容詞述語文

(『日本語の研究』 1-4)

So Adnominal Form Construction in Ancient Japanese as an Emphatic Sentence Structure from the Perspective of the Arrangement of Words

語順から見た強調構文としての上代「-ソ-連体形」文について

(『日本語の研究』 5 - 3)

The Subject of Ancient Kana Prose Works Research as Japanese Ancient Language Materials : How Research into Textual Criticism Confirms the Existence of Words (<Special Issue> The Current State of Document Research)

古代日本語資料としての仮名散文作品研究の課題：語の認定をめぐる原典批判論的知見について (<特集>資料研究の現在)

(『日本語の研究』 4 - 1)

Aspects of Personal Names in Ancient Japanese : With an Emphasis on Contradistinctive Naming According to Seniority in *Ki-Shoki*

上代人名の様相：記・書紀における長幼の序列による対比的命名を中心に

(『日本語の研究』 2 - 1)

The Final-Attributive in Heian Japanese Conversational Texts

平安和文会話文における連体形終止文

(『日本語の研究』 1 - 4)

A Study of Materials of Japanese Ways of Reading Chinese Classics in the Insei Period : Regarding the Shingon Sect's Educational and Scholastic Exchange (<Special Issue> The Current State of Document Research)

院政期訓点資料研究の一問題：真言宗における教学的交流を巡って

(<特集>資料研究の現在) (『日本語の研究』 4 - 1)

The Distinction of the Meaning between *yo* (night) and *yoru* (night) in Classical Japanese

古典語「ヨ(夜)」と「ヨル(夜)」の語義の区別

(『日本語の研究』 5 - 1)

A Study on the Disappearance of Reading Boundaries in Medieval Texts Read According to Go Pronunciation

(74)

中世呉音字音直読資料における境界の消滅について

(『日本語の研究』 5 - 3)

Tense-Aspect Systems of Late Medieval Japanese and Modern Korean : The Problem of Grammaticalization (<Special Issue> Grammaticalization in Japanese)

中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系：存在型アスペクト形式の文法化の度合い (<特集>日本語における文法化・機能語化)

(『日本語の研究』 1 - 3)

The Significance of *Jukan-bon Setsuyōshū* (寿閑本節用集) : A Description of *Setsuyōshū* (Japanese Lexicon), during the Medieval and Following Age, Published in the Keichō Era (<Special Issue> The Current State of Document Research)

寿閑本節用集の意義：慶長刊行節用集の記述のために (<特集>資料研究の現在)

(『日本語の研究』 4 - 1)

Grammatical Changes in *kore* in the Early Edo Period

近世初期における指示詞「これ」の感動詞化

(『日本語の研究』 6 - 2)

The Establishment of *-te* + Specifier Construction in Kamigata Dialects

近世前期上方における尊敬語表現「テ+指定辞」の成立について

(『日本語の研究』 2 - 4)

The Change of *-te*+Specifier Construction of Kamigata Dialects

近世上方における尊敬語化形式「テ+指定辞」の変遷

(『日本語の研究』 5 - 1)

History of the Pitch Accent of Compound Nouns in Early-Modern Kyoto Japanese : Focusing on Compound Nouns with 2 + 3 Mora Structure Comprised of Native Morphemes

近世京都における複合名詞アクセントの史的変遷：和語から成る「2 + 3 構造」の複合名詞について

(『日本語の研究』 5 - 4)

On *chatta* : An Honorific Form Appearing in a Kyōto–printed *Sharebon* Published in the Second Half of the Edo Era

近世京都語資料に現れた待遇表現形式チャッタに関する覚書
 (『日本語の研究』 3 – 1)

The Contrast between the Negative Auxiliary Verbs *Nu* and *Ne*: in the Edo Period

江戸語にみられる否定助動詞ヌとネエの対立
 (『日本語の研究』 2 – 2)

A Note of “*Tiyatuta*” of the Western Dialect in the Latter Edo Period

近世後期上方語における“ちやつた”の扱いについて
 (『日本語の研究』 3 – 4)

Honorifics of the Samurai Class at the Close of the Feudal Era, as Seen in *Kuwana Nikki*

『桑名日記』にみる近世末期下級武士の待遇表現
 (『日本語の研究』 4 – 2)

A Study of the Conjunctive Particle *keredomo* during the Edo and Meiji Period : A Comparison with *ga*

江戸語・明治期東京語における接続助詞ケレド類の特徴と変化：ガと対比して
 (『日本語の研究』 3 – 4)

Korean Phrase Books Published in the Early Meiji Era as Research Materials of Modern Japanese

日本語資料としての朝鮮語会話書〔明治前期〕
 (『日本語の研究』 4 – 2)

Reform of the Usage of *Kana* in Newspapers during the Meiji and Taisho Periods

明治・大正期における新聞の仮名遣い改革
 (『日本語の研究』 5 – 2)

The Formation and Establishment of the Word for “Love Triangle” “*Sankakukankei*”

in Japanese and “*Sanjiao lian'ai*” in Chinese : Based on Japanese–Chinese
Vocabulary Exchanges of the 1920 s

恋愛用語「三角関係」と「三角恋愛」の成立と定着：1920年代の日中語彙交流
の視点から

(『日本語の研究』 6 – 2)

The Formation of the Concept of Japanese Parts of Speech *Keiyōshi* and *Rentaishi* in
Modern Japanese Grammar

近代文法学における「形容詞」「連体詞」概念の形成について：Adjective から
形容詞・連体詞へ

(『日本語の研究』 2 – 2)

Change in the Intransitive–transitive System of Sino–Japanese Verbs from the Early
Modern Period to the Present

漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化

(『日本語の研究』 3 – 4)

Grammaticalization in Modern Japanese : On the Continuum between Content Words
and Function Words (<Special Issue> Grammaticalization in Japanese)

現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって (<特集>日
本語における文法化・機能語化)

(『日本語の研究』 1 – 3)

The Structure of Modern Japanese Exclamatory Sentences : On the Structure of the
Nanto-Type Sentence

現代語の感動文の構造：「なんと」型感動文の構造をめぐって

(『日本語の研究』 2 – 1)

On the Semantic Function of Actual Potentials in Modern Japanese : Contrasted with
Unmarked Verbs

現代日本語における実現可能文の意味機能：無標の動詞文との対比を通して

(『日本語の研究』 3 – 2)

4. おわりに—今後の展開—

本稿が示したような調査を、アメリカやイギリス等で発行されている学術雑誌も含めて大がかりに行い、その結果をまとめれば、英文タイトル等を作成する際に役立つだろう。

また、言語学に関する英語論文の要旨や本文等の調査を行えば、用いられやすい用語や言い回し等も分かるはずである。

既に、他分野ではこのような研究が進んでおり、例えば、佐藤2010の「英語論文自動作成フォーム」と「英語論文テンプレート」等は、英文タイトルから本文、謝辞等までも網羅するものとなっている。

なお、福嶋2007では、留学生が、400字レベルの日本語記述問題を能率良く書くことができる「スロット型教材」を提案しており、また、安部・福嶋・橋本2010では、留学生や日本人大学生が、6000字レベルのレポートを能率良く作成できる「スロット型教材」を提案している。

本稿では、英文タイトルの小規模なバリエーションを示したのみであるが、この延長線上には、日本語学の研究成果を英語で発信できるような「スロット型教材」の作成を念頭においている。このような研究を重ねることによって、日本語学の研究成果を海外に発信しやすくなればと思う。

注

- * 1 なお、金水2003等をはじめ、既にいくつかの研究はある。
- * 2 基本的に古い時代名を含むものから示しているが、厳密なものではない。

《引用文献》

- 安部朋世・福嶋健伸・橋本修 2010『大学生のための日本語表現トレーニング ドリル編』（三省堂）
- 金水敏 2003『統合化された言語学・国語学用語集のための基礎的研究』（平成14年度科学研究費基盤研究（C）（2）研究成果報告書、課題番号：14510618、研究代表者：大阪大学大学院文学研究科 金水敏）
- 佐藤洋一 2010『科学技術英語論文英借文用例事典』（オーム社）
- 福嶋健伸 2007「日本留学試験の記述問題について—教育現場から「評価」の妥当性を問い直す—」（2007年度日本語教育学会春季大会於：桜美林大学（『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』）、2007年5月27日発表、pp.207-213.）

(78)

(ふくしまたけのぶ・実践女子大学准教授)